「明海日本語」第 13 号（2008. 2）

小・中学校における外国人児童・生徒への日本語・教科指導の必要性

── 本庄市における支援及び日本語指導の様子 ──

山　田　里　恵

キーワード：外国人生徒，生活言語，学習言語，日本語指導，居場所づくり，コミュニケーション方法

0. はじめに

本論では小・中学校における支援及び日本語指導[1] の様子について論じたい。

本調査を行ったのは教育実習がきっかけである。そこで初めて外国人生徒[2] への日本語指導を観察した。普通学級[3] では「お客さん」状態になって静かにしている外国人生徒が，日本語教室[4] でストレス発散をしていたことから外国人生徒への支援や日本語指導に興味を抱き，調査を開始した。本論では居場所づくりを中心に，現在の外国人生徒に対する支援・教育について考察する。

1. 調査について

日本語の支援が必要な外国人生徒に対する支援のあり方を明らかにしたい。本論では，良い支援の例として本庄西小学校を中心に取り上げる。今回行った計 18 ヶ所での調査をもとに，本庄西小学校を他の教育機関，団体と比較し，支援のあり方を考えたい。

1-1　調査対象について

本庄市及び本庄西小学校を中心に調査する。本庄西小学校は，全国的に見ても日本語の支援を必要とする外国人生徒が多い。具体的な人数は後述する。また，外国人生徒に対し多くの工夫を試みているので，その試みについて取り上げる。

1-2　調査方法

2007 年 5 月から 2008 年 1 月にかけて，埼玉県内の小学校 4 校，中学校 2 校，ボランティア団体

2ヶ所で授業観察を行い，本庄西小学校では参与観察も行った。埼玉県6ヶ所，東京都2ヶ所，千葉県1ヶ所の役所に問いあわせをし，外国人生徒への支援担当を担っている役所の担当者にインタビューを行った。また，校長先生，教頭先生，日本語指導員[5]，一般教諭，通訳，外国人生徒の支援を記事にした読売新聞記者の矢子氏にもインタビューを行った。

1-3　調査目的

本庄西小学校を対象に調査を行う目的は次の4点である。⑴日本語指導の学校での位置づけを明らかにする，⑵保護者や外国人生徒に対する支援の方法，工夫を記述する，⑶日本語指導以外の外国人生徒とのコミュニケーションを観察する，⑷支援が外国人生徒にとって，どのような成果をあげているか，を明らかにする。

2. 外国人生徒[6]の数について

日本語指導が必要な外国人生徒について記す。日本語指導が必要な外国人生徒について「国際人流」編集局（2007：13）は，日本語で日常会話が十分に出来ない，学年相当の学習言語[7]が不足し，学習活動への参加に支障が生じており，日本語指導が必要な外国人生徒[8]としている。また，日本語指導に関して，岡崎（2000：150）は生活言語[9]を習得するのに1〜2年程度の所要期間ですむのに対し，学習言語の場合は，海外での研究によると5〜10年程度かかると述べている。

文部科学省の発表[10]によると国内で学ぶ外国人生徒数[11]は小学校15,946人，中学校5,246人であり，国内の全生徒の内の小学校0.2%，中学校0.1%である。本庄市教育委員会担当者の話[12]によると，本庄市で学ぶ外国人生徒数[13]は小学校66人，中学校9人であり，市内の全生徒の内，外国人生徒の割合は小学校1.4%，中学校0.3%である。

本庄西小学校の校長先生の話[14]によると外国人生徒の割合は全生徒の内の9.3%であり，日本国籍取得者を除いた外国人生徒は46人である。本庄西小学校調査時[15]に高学年クラスの日本語指導の時間割表を見た。そこには26人の外国人生徒に対する日本語指導の時間割表が載っており，26人全てがTT[16]，日本語教室での支援を受けていることがわかった。

本庄西小学校に外国人生徒が多い一方で，山田（2007）では，5人に満たない学校も多かった。比較すると，本庄西小学校には外国人生徒数が多いといえる。全国の在籍人数別学校数によると，外国人生徒数が5人未満の学校は全体の8割である。つまり，本庄西小学校は全国の2割にあたる5人以上在籍している学校に入ることになる。現在は5人以上在籍している学校は2割だが，今後本庄西小学校のような学校が増えていくだろう。

3. 支援，日本語指導の必要性

熱海（2003：78）には，加配教員は1校5人以上の外国人生徒[17]がいる時にのみ許可され，担

当者がいない場合は，支援なしに努力を続けるしかないとある。しかし，山田（2007）では，桶川市[18] は日本語指導を必要とする外国人生徒が 2 人しかいないのにもかかわらず，市から日本語指導員を派遣して支援していた。財政難の為に教員数や教材費が足りなくなり，何の支援もしていない地区もあるだろう。だが，人数にかかわらず日本語指導を必要とする外国人生徒には支援をする必要がある。

2007 年 10 月に鴻巣北中学校で調査を行った際に，日本語指導員の方々から外国人生徒 A について次の話を聞いた。

「A は小学校 2 年生の頃から日本に住んでいるが日本語指導を受けられなかった。日本語指導を受ける前は，体育の授業がある日は休み，何事にも消極的だった。しかし，日本語指導を受けられるようになってから学校に休まないで来るようになり，体育の授業にも参加するようになった。また，何事にも意欲的に行動するようになった」。

授業の中身についていけるようになり自信がついた為だと推測できる。

日本語指導を受ける前は学校を休みがちで，消極的だった A が，日本語指導を受けてからは，学校に来るようになり，何事においても積極的になった。自信がつくことで，日常生活においても積極的になる。このことから，日本語指導を必要とする外国人生徒には教育にまわる財政の不足に関わらず，何らかの支援をすべきであると考える。

4. 本庄西小学校の調査報告

多くの支援者から次の話を聞いた。

「日本語指導を受けている者の中で，幼い頃から日本に住んでいる為に母語を忘れてしまい，保護者と母語で会話をしている時などに片言程度しかわからず，且つ家庭では保護者の母語で会話をしている為に，日本語も不十分な者もいる」。

この場合，普通学級で勉強についていけなかったり，家庭に帰っても相談出来なかったりすると孤独感を抱き，居場所がなくなることが考えられる。その為，支援者側の居場所づくりが必要になる。4 章では他地区，他学校では見られなかった支援の工夫を中心に記す。本庄西小学校では掲示物の工夫や給食を一緒に食べるなどの工夫が見られた。それらの具体的内容と成果について以下に記す。

4-1　支援者全員によるサポート

本庄西小学校にはあいさつのカード，母国[19] に関する絵や写真を日本語教室や廊下に掲示して

写真１　廊下の掲示物

いる（写真１参照）。日本語指導員Ｂは「掲示物は日本人が海外に行って日本語で表記されたものや日本のものがあると安心する気持ちを思い浮かべながら工夫している」と掲示物について説明した。掲示物の他，教室には日本語指導員と通訳計２人に対し，教卓が２台あり，１日の多くを日本語教室で過ごせるようになっている。１日の多くを日本語教室で過ごせる学校は本庄西小学校のみだった。校長先生からは次の話を聞くことが出来た。

「通訳が夏休みなどの長期休みにブラジルに帰った時，ブラジルから植物の種を持って帰ってきた。教師が学校でビニールハウスを造ったが，日本とブラジルでは気候が違う為に種が芽を出しても，途中で枯れてしまう」。

支援者の努力が実り，植物がきちんと育てば，多くの生徒は母国の植物を見ることができ，学校に行く楽しみが増えるだろう。日本語教室でストレス発散して元気に勉強できるのは，支援者全員が生徒全員に対して，自立できる為の支援を居場所づくりとして行っている成果だろう。支援者全員で支援しなくても，誰かが支援すれば大丈夫だろうと人任せにしてしまう人もいるかもしれない。だが本庄西小学校のように，支援者１人ひとりが主体的に外国人生徒と向き合い，行動することで，支援の改善点も見えてくるだろう。良い支援をする為にも，支援者全員が外国人生徒にむきあい，サポートする必要がある。

4-2　外国人生徒を理解する大切さ

本庄西小学校では，週に何回か日本語教室で日本語指導員，通訳，学年ごとの外国人生徒が一緒に給食を食べる。２回目の訪問時には，給食を６年生の外国人生徒と一緒に食べた。他の学校では日本語教室で一緒に給食を食べている様子を目にすることはなかった。実際に一緒に給食を食べてみて，同じ目線で食事をしたり，共に過ごす時間が増えたりすることで，日常生活について話を聞

く時間がとれ，１人ひとりを理解しやすくなることが体験できた。普段からコミュニケーションがとれていれば，指導もしやすく，安心できる場所にもなる。その証拠に，休み時間に多くの外国人生徒が頻繁にＢに自身の話を聞いてほしいと話しかけたり，必要以上にちょっかいをだしたりしていた。

柿本（2006：4-14）では，下福田中学校における「選択国際」のカリキュラムの成果を述べている。下福田中学校では，多くの教師が外国人生徒を「異質な，距離のある存在」と見ていたと指摘する。外国人生徒は学校から離脱し，非行に走っていた。その後，「選択国際」という外国人生徒の為の授業を選択教科で行った。「選択国際」を位置づけて数年後，成果として不登校生徒の減少や外国人生徒の進学率の高さとなって現れ始めた。

本庄西小学校，下福田中学校は共に外国人生徒を理解しようとしている。外国人生徒にとっても安心できる場所になっているのだろう。給食を一緒に食べたり，休み時間に日本語教室に来るのは，成果ではなく，逆に普通学級でうまくいっていない証拠だという指摘があるかもしれない。今回の調査だけではその可能性を完全には否定できない。だが，学校が安心できる場所になれば，普通学級での孤立や不登校になること，非行に走ることを防げる。また，支援者との触れ合いで，居場所がみつけられ，安心できるだろう。このことから支援者からコミュニケーションをとったり，手を差し伸べたりすることは，外国人生徒が安心していられるので意義があると考えられる。

5. 結　論

外国人生徒に対する支援（居場所づくり）の一端を明らかにした。本庄市，本庄西小学校を取り上げ，他地区と比較しながら記した。本庄西小学校における外国人生徒への支援方法は居場所づくりに繋がっている。支援の工夫として次のようなことが観察された。

⑴　外国人生徒の母国に関する掲示物の工夫や植物を育てようとしていることなどから，支援者全員でサポートしていることがわかった。現時点ではその成果は明らかではないが，インタビューの結果から現場の教師がそれに期待していることがわかる。

⑵　給食を一緒に食べる様子が見受けられた。支援者が外国人生徒と一緒にいる時間を長くすることによって，外国人生徒が支援者に信頼を寄せ，甘えたような態度を見せていた。

6. 今後の課題

居場所づくりをする為には，外国人生徒と向き合うことが重要だということを学んだ。受け入れ側が相手の気持ちを理解し，受け入れることも大切である。今後，外国人生徒にかかわり支援していき，「お客さん」状態にならない方法や居場所づくりについて支援すると共に，多くの人に伝えたい。本論が今後の支援・教育に役立つことを望む。

謝　辞

本研究の調査にご協力頂いた学校関係者，ボランティア関係者，読売新聞記者の矢子氏，及び外国人生徒の皆様に心より感謝致します。また，今回，論文執筆中にご指導頂いた井上史雄先生，山下暁美先生，西川寛之先生，中川仁先生，堀内貴子氏に心より感謝致します。

〈注〉

（1）　日本語指導員（注(5)参照）が普通学級（注(3)参照）では日本語がわからない為に，勉強についていけない外国人生徒（注(2)参照）を対象に日本語や教科の指導をすることである。

（2）　本論では児童・生徒をあわせて生徒とよび，国籍や，出身等に関わらず，日本語指導を必要とする生徒を外国人生徒とよぶ。

（3）　全生徒を対象にした同一の時間に共同で学習する集団のこと。学級ともよばれるが，本論では普通学級と表記する。

（4）　日本語指導が行われる教室。学校，市によっては国際理解教室や国際教室，日本語指導教室，日本語教室などともよばれ，言い方が異なるが，本論では日本語教室と表記する。

（5）　主に注(1)を行う教師。また，授業を教える以外にも外国人生徒の相談にのったりする。県や市から派遣された日本語指導員や給与負担等を受けた加配教員がいるが，本論では日本語指導員とよぶ。

（6）　2章でとりあげる外国人生徒とは，日本語指導を必要とする外国人生徒のことである。なお，日本語指導を必要としない外国人生徒は2章の外国人生徒の定義には含まない。

（7）　日常の社会生活で用いられる言葉に対して，学校内で授業や試験時に使われる言葉を示す。

（8）「国際人流」編集局では児童生徒と記してあるが，本論では外国人生徒と表記する。

（9）　学校内で授業や試験等に使われる言葉に対して，日常の社会生活で用いられる言葉を示す。

(10)　文部科学省 H.P. 参照。外国人生徒数，全国の外国人在籍人数別学校数は平成18年現在，国内で学ぶ全生徒数は平成19年現在のものである。

(11)　文部科学省 H.P. では，日本語指導が必要な外国人児童生徒と表記しているが，本論では外国人生徒と表記する。

(12)　2007年9月現在に聞いたものである。

(13)　本庄市では外国人児童生徒とよんでいるが，本論では外国人生徒と表記する。

(14)　2008年1月現在に聞いたものである。

(15)　2007年11月現在に聞いたものである。

(16)　本論の TT（チーム・ティーチング）とは，日本語指導が必要な外国人生徒が普通学級で勉強している時にわからない部分を補佐する為に，通訳や日本語指導員がその児童生徒の側で，授業内容を簡単な日本語やその外国人生徒の母語に言い換えて教えること。

(17)　熱海（2003：78）では，外国人児童と表記しているが，本論では外国人生徒と表記する。また，「名」と数えているが，本論では「人」と数える。

(18)　桶川市の情報は，2007年12月現在に桶川市教育委員会の担当者から聞いたものである。また，支援を受けていたのは児童だったが，本論では生徒と表記する。

(19)　本論に記す母国とは，国籍上のものではなく，外国人生徒が，自身のアイデンティティー確立の基盤となる文化圏のことである。

参考文献

熱海まき子（2003）「中学校の実践・国際教室の役割」スリーエーネットワーク（2003），p. 78

岡崎敏雄（2000）「講演とシンポジウム『年少者への日本語教育を考える』概要報告」『日本語教育』105号，日本語教育学会，p. 150

岡崎眸，小田珠生，清田純子，佐藤真紀，朱桂栄，高橋織恵，原みずほ，三宅若菜，河野麻衣子，富田啓子（2003）「二重言語環境に育つ子どもたちの役割・言語的発達をどう促進するか」スリーエーネットワー

ク（2003），p. 73
柿本隆夫（2006）「教育課程に『外国人生徒のための授業』を位置づける」清水睦美，児島明（編）（2006）pp. 4-14
「国際人流」編集局（2007）「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況」『国際人流』財団法人入管協会，p. 13
埼玉県教育委員会（2006）『彩と武蔵の学習帳』関東図書
佐久間孝正（2006）『外国人の子どもの不就学』勁草書房
清水睦美，児島明（編）（2006）『外国人生徒のためのカリキュラム ── 学校文化の変革の可能性を探る ──』嵯峨野書院
スリーエーネットワーク（2003）『スリーエーネットワーク創立 30 周年記念フォーラム「ことばと学び ── 昨日，今，明日 ── 多文化共生時代の子どもの教育」』
山田里恵（2007）「小・中学校での日本語教室における授業の様子・支援 ── 外国人生徒への日本語・教科指導のとりだし授業 ──」卒業論文